

軌道の鏢

小島效

時は大正十四年

陸月は中の七日なり。

路を隔つる友の家に

飽ぬ遊びにありけるが

午砲の音に唆られて

立ち出でけるは七つ八つ

水兵服の装ひせる

いとし姿の童兒なり。

今し向ひの吾家さし

軌の道を過らむと

折こそ悪しく彼方より

塵の煙を捲きたてて

幕進せるに遭ひにけれ。

耳を撃く警しめと

制御の術もあだなれや

救ひの網にかかりたり
周章ふためくをさなごは
神の御手より洩れにけむ
翻筋斗きつてあはれにも
軌道の面に落ちたれば
勢止まぬ魔の車輛
童兒を嚙んで突き進み
惨の極みに彩りぬ
集へる者は顔背向け
唯暗涙に咽ぶのみ。
今の前まであどけなき
神の使と紛ふべき
いとしいとしのをさな子は
あはれ軌道の鏢となり
消え失せたるぞ傷しき。
遠き昔の奈良の代に

子等を偲びて詠みにける
山上主の歌情
今も昔に變らざれ
況していささか障なき
蕾の花をむぎむざと
手折るが如く散しては
思ひの胸は如何ならむ。
文化の惠衆人の
往來に便る交通の
かなめともある軌道さへ
いとし親子の呪の魔
人智の力彌進み
斯る憂のなくもがな。

(こじま慈服)

所謂五十三次く十日は昔今は一日汽車の旅と、鐵道の普及は東西兩地を隣接せしめ、生産地の物價を昂め消費地の物價を低落させ、産業の振興開發の上に偉大な力のあることば何人も認

むる所であるけれども、一層一般交通の設備である道路の功德に至つては、人々之に慣れて却つて水や空氣や光線の人生に貴重なる價値を忘るゝやうに、其の恩澤に氣付ぬやの憾みがある。殊に道路交通の用具に大變革を來した自動車の普及は、道路の能率を彌大ならしむるものがあるから、道路の改良は益々緊切に迫つて來た。

人體に於て血液の循環に結滞なきの大切なことは何人も異論のない所である、併しながら之は單に大動脈管の働きばかりではない、其の末梢たる毛細血管の支障なき作用に依るでなければ健全なる運行を得ない鐵道は大動脈の働きをなし、道路は毛細管の役目を果たすとせば、相互に輔車唇齒の關係で其の設備は兩ながら完備を期せねばならぬ筈である、今日鐵道の普及

と施設が充分であるとは認められぬが、道路の状態はまた遙に後れて居る、道路を改良して自動車の機能を充分ならしむ事ならば、近距離輸送では鐵道に打ち勝るといふことであるから、益々其の改良を叫ばざるを得ない。

元來道路は公の設備であつて、新設改築修築共に夫々の管理者が極つて居て之に要する費用負擔の筋道も通つてゐるから、時運に相當する改良が行はるべき筈であるけれども、事實は極り通り進行せぬところを見ては、寔に安閑として居られぬ、獨り道路問題と言はず、世上百般の事相は法則通りの進行を事實上期することが出来ない、其處で吾人は此通弊を補ふ爲に一つの要求を有つ、夫れは道路に對する世間の興味である、語を換へて謂ふならば、道路の改良と其の實施方とを目標とした繼續せる世間の努力である。

或る田舎の村落にかけ離れた一軒家があつた、主人は格別の働きもなく僅かの勞銀や妻女の賃仕事位で日を暮して居た。勿論生活は逼迫で、時々夫妻睨み合ふこともあつた、其處へ子供は増す妻女の働きは思ふに任せず困つて居つた、所が因果は廻

る小車で、幸ひにも其の家の前に縣道が開けるやうになり村道が附近で新縣道へ通することとなつた、そこへ主人従軍の功に由る恩賜金が下つた、そこで小さな雜貨雜貨の店舗を開いた、夫れが意外の繁昌で數年ならずして福裕なる境涯に入り家の内も春陽麗とも言ふやうになつたといふ、陞色道路改良の一挿話がある。また市街地に於ける道路改良の効果は、眞に洪大なものである。全然經濟事情を一變する、建築物の整美、交通の繁華市況の殷賑と何から何まで好況に赴かぬものはなく、資源涵養の因由とならぬものはない。

凡人情の流は生活の容易なる而して饒なる流域に酌まうとする、之は自然の勢である、新道の開通で訪ふ人はなき岡部の花も世間に紹介された世に現はれぬ温泉も汎く各地の客を招く等の事例は、今更斗へ擧ぐる迄もないが、就中大なる利益は産地と市場と接近即産業振興、物資配給の迅速正確と其の諸掛りの低廉とにある。

近來魚類でも野菜でも其の運搬配布は悉く自動車に依つて爲されるやうになつた、新鮮を貴ぶ之等物資の配給が便利な運搬

具に依るに至つたことは自然の歸趨であるけれども、路の悪い爲に動もすれば之等重量積載の貨車が沿道の人家に突入して椿事を起すことの時々あるを遺憾とする、曾て野菜を満載した自動車は鹽物屋の擔先に突入し所が、折悪しく主人が商品の陳列をして居つて、車輪が足の踵に觸れて大傷を被つた、主人は之が爲に入院して手術を受けたが經過不良で終に死亡した、之れは何故斯る慘事を惹起したか蓋し路幅の不充充分な所へ軌道が布設してあり、乗合自動車が通つて居り、又其の附近が單線軌道の待避線のある所で、之等諸車が相避くる際に起つたやに察せられるが、道路が交通の狀況にそはぬのが主因に相違あるまいと思はれた。

要するに道が良くなれば交通の流は其處に趨く、人生の繁榮は其處に導かれる、交通の慘事も頻出しないことになる、併しながら此の大切な事業が容易に撻取らぬから唯成行のみを眺めて居られぬ、其處で前陳の通り世間の努力を切望する次第である。

(終り)